にもいるようで，女性が改良種でいっぱいになった袋を道路わきに置いて，市場へ行こうとオートバイを待っていると，「そんなの売れないぞ」と言われたりする．キャッサバの加工品をつくっている人たちの中には，改良種が水分をあまり含まないため加工するとたくさんつくって儲けられるという理由で，それを好んで高値で買おうとする人もいる．だから，改良種が売れないというのは必ずしも正しくないのだが，そういう人を見つけるのも難しいので，売れないと思われてしまうのだ．

「きれいでない」と言われた改良種．大きな背中が小さく見える．昔はあれほど視線を集めたのに，今はもう見向きもされない．その居場所は，誰がどうやって見つければよいのだろう．

なぜ「今，ここ」に「これ」がないのか
―籾殻コンロ開発奮闘記―

平　野　　亮*

「籾殻コンロ」なるものを開発している．

タンザニアの地方都市には零細な鉄工所があちこちに軒を連ね，それぞれが鍛冶や溶接などの簡単な技術を用いて，農具から調理器具，家具，鉄格子や門扉まで，ありとあらゆる生活実用品を製造している．わたしは，そうした町工場に「弟子入り」し，職人たちとともに働きながら，小規模・零細鉄工業の実態について研究しようとしていた．

ある日，籾殻（もみがら）を燃料にするコンロをつくれないだろうかという依頼が工場に舞い込んできた．国内では，森林の減少によって燃料不足が深刻化する反面，稲作の拡大にともなって籾殻が大量に廃棄されるようになっている．その手つかずの資源をどうにか利用できないかというのだ．

鉄工所の親方であるK氏は，環境問題や社会貢献にかねてから関心があり，おがくずを詰めて燃焼させる「おがくずコンロ」を独自に改良し広く普及させた実績をもつ．籾殻は未知の材料だったが，やれるだけやってみようと製品開発を引き受けた．

進まない製作

当初わたしは，どのように新製品が開発されるのかを間近に見られると期待し，その様

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

子を傍観していた．しかし，K 氏はほかの仕事に忙しく，開発はなかなか始まらない．催促してようやく試作に取りかかったが，籾殻は燻るばかりで一向に燃えあがらず，開発はたちまち暗礁に乗り上げてしまった．

気になってわたしもインターネットで調べてみると，東南アジアですでに「籾殻コンロ」は開発されていた．その写真や図を工場の職人たちに見せると，彼らは食いつくように見入って，あれやこれやとその仕組みについて考えをぶつけあった．熱い議論はその後も何度か繰り返されたものの，だれひとりとして実際につくってみようとはしない．しつこく催促したことでようやく職人のひとりが試作することになったが，彼もほかの仕事で忙しいことを言い訳にコンロの試作には集中できず，時間ばかりが過ぎていった．

今から思えば，歩合制の職人の世界で，売れる保障もない商品に時間と労力をつぎ込む余裕はなかったのであろう．

わからないからやってみる

開発の停滞は，ついにわたしを製作に駆り立てた．すでに町工場の環境にも慣れ，基本的な技能も身につけ，時間と労力はあり余っていた．「弟子」から一転，「社内起業家」の誕生である．

インターネット上の情報をもとに，見よう見まねで模造を試みた．もちろん，工学の知識が豊富なわけでも工作の経験があるわけでもない．試作と試験と失敗を繰り返しながら，その構造と原理を理解していく．

主体的には動かない職人たちも，開発自体には強い関心があるらしく，協力は惜しまなかったし，何より口を挟みたがった．コンロがうまく燃えないと，そのたびに失敗の原因について自信たっぷりと講釈してくれる．残念ながら，先入観にまみれた彼らの経験知は，さらなる失敗を誘発するばかりで，実質的な役には立たなかった．しかし，この失敗の山と先入観への反発が，閉塞状態を打開してくれた．わたしたちは「通気がよいほどよく燃える」と思い込んでいたのだが，何気なく給気を絞ってみたら籾殻が青い炎をあげて勢いよく燃えあがったのである（写真 1）．

その後も先入観に何度も裏切られたことは，わたしのうちに，どんな突飛なアイデアでも試すに値するという考えをもたらした．何しろ素人の自分は何も知らないのだ．「やってみないとわからない」というより，「わからないからやってみる」［橋本 2001］．その精神は今も変わらない．

動かない職人

試行錯誤の末に，製品として及第点のコストと性能をもつ試作品が完成した．籾殻特有の濃い煙も発生せず，強い火力で 1 リットルの水が 10 分足らずで沸騰した．

職人たちは，驚き，喜び，「これは絶対に売れる」と断言し，「作り方を教えてくれ！」と頼みさえしてきた．ところが，わたしが帰国し 1ヵ月後に戻ってみると，その完成品はガラクタのように工場の片隅に放置されていた．

職人は普段，客から注文が来るのをただ待っている．売れるかどうかもわからない新製品を自ら売ってまわるなどということは，

写真 1　籾殻コンロ

彼らの仕事ではなかったのだろう．現地で手に入る材料，知識，道具・技術レベルで製品をつくることには成功したが，それだけでは普及には至らない，それはほんの始まりに過ぎなかった．

いっそ援助でやっていれば…

完成した試作品は消費者のニーズに適合するのか．「社内起業家」は市場テストに乗り出す．稲作地域の村では，精米工場のわきに積まれた 3 階建のビルほどの高さはあろう籾殻の山に圧倒されつつ，工場の前で籾殻コンロを実演した．何事かと群がってきた人たちから，青い炎に驚きの歓声が上がり，持ってきた試作品はたちまち売り切れた．結局，3 回訪れて計 10 台のコンロを販売したが，その盛況ぶりは留まるところを知らなかった．

ところが，3ヵ月後に購入者の家々を訪ねてみると，ほとんどの家庭がコンロを使用していなかった．この籾殻コンロは数分ごとに側面を軽くたたいて灰を下に落とす必要があるのだが，それが煩わしいのだと言う．放置すると火が消え，煙が目や鼻に襲いかかる．淡々と不満を口にするものの，金を返せと言わんばかりの眼差しが，わたしの顔面を殴りつけた．すっかり打ちのめされ，頭の中でふと呟く．「利益なんてどうでもいいから，いっそのこと援助でやっていれば…」

タダで配っていればこんな思いもせずにすんだのではないか．たとえ使われなくたって粗悪品を売りつけたという罪の意識を感じることもないし，貰ったものに対してそんなに文句を垂れることもなかっただろう．

ただしその場合，開発はそこで終わっていたかもしれない．彼らの厳しい意見は，その後，改良や新製品の考案，ターゲット層の見極めを促した．それが糧となり，ぼやけていた消費者のニーズが掘り下げられたのだ．そして何よりも，生産者と消費者をつなぐ「媒介者」の重要性にも気づかされた．

それまで得てきたのは「手放しの賞賛」ばかりだった．しかし，本当に必要なのは「リアルなフィードバック」である．それはタダでは手に入らない．

買ったのに使わない人と貰っても使う人

再び，先入観に反する事実が判明する．試験販売の前に，別の都市のスラムに住む知り合いに籾殻コンロをひとつ贈っていた．彼の家ではそのあと半年以上もこのコンロを愛用しており，薪や木炭をほとんど買わなくなったという．彼の「手放しの賞賛」は少々くすぐったくはあったが，それは実用性を示す「リアルなフィードバック」でもあった．

「買ったら使う，貰ったら使わない」という思い込みは裏切られた．購入者の中には，

買ったにもかかわらず一度も試そうとさえしない者までいた．性急な一般化はできないが，購買力はあるがさほどニーズのない層と購買力は乏しいが切実なニーズを抱える層という市場のねじれがそこにうかがわれる．

なぜ「今，ここ」に「これ」がないのか

一朝一夕にはうまくいかないことはわかった．けれども，普及する条件は十分揃っているように思える．「薪がなければ籾殻を燃やせばいいじゃない」なんて，そこまで奇抜な発想ではない．この「グッドアイデア」はすでに具現化されており，だれでもその情報にアクセス可能だ．つくるのに特殊な材料も高度な技術も要らずコストも現実的である．そして，需要は青天井．

「なぜ『今, ここ』に『これ』がないのか.」それがことあるごとに頭をよぎる．なぜ，現時点でこの地に「これ」がすでに普及していないのか．「これ」が普及しているという，あってもおかしくない「現実」は，なぜ「現実」にならなかったのか．この問いが，研究の裏テーマとなった．[1)]

おれが本気でやったらうまくいくのか

籾殻コンロに限らず，外部のテクノロジーを普及させようとしてこれまで無数の失敗が繰り返されてきたし，その「犯人捜し」も散々やられてきた．それでもなお，「今，ここ」に「これ」はない．結局その理由はよくわからない．「わからないからやってみる.」

「おれが本気でやったらうまくいくのか.」それが裏サブテーマである．[2)]「本気でやる」とはつまり，「あらゆるプロセスの責任を引き受ける」ということである．コンロ製作の停滞も購入者からのクレームも，その「犯人」を自分の外に求めている限り前には進めなかった．

この「アクションリサーチ」の中で，自分の「アクション」が正しいのか間違っているのか，いつも疑心暗鬼になる．しかし，「こうすればうまくいく」というルーチン化された「正解」は存在しない（あるならとっくに普及している）．それは「うまくいった」あと遡及的にしか「正解」にならない．現時点においてその「正しさ」を担保しているのは，わたし自身の遂行性をおいてほかにない．

「これは籾殻コンロではない」

ルネ・マグリットが描いた『イメージの裏切り』をご存じだろうか．パイプの絵の下に「これはパイプではない」と書いてある絵である．先に，籾殻コンロの写真を載せ，その下に「籾殻コンロ」と書いたけれど，もちろん「これは籾殻コンロではない」．

わたしが扱っているのは情報ではなく実体である．つくりあげたいのはモデルではなく実例である．その記録はフィールドノートの中にはなく，その成果は論文の中にはない．

「いいから黙って聞いてくれ」というのが，

1) 表テーマは「タンザニアにおける籾殻コンロの開発と普及に向けた実践的研究」である．
2) 表サブテーマは今のところない．

「書く人」のマインドセットであるならば，「いいから黙って見ていてくれ」．それが，今わたしの胸中だ．

引　用　文　献

橋本　治．2001．『「わからない」という方法』集英社．

Identity, Language and Education under Conflict Situations: A Glimpse into the Lives of Kokang People in Myanmar-China Boarder

Gu Pingyuan*

I. Kokang Ethnic Conflict

Kokang people are ancient continental Chinese immigrants to the Northern Shan States of Myanmar from Yunnan province of China. They now live in the Kokang Self-Administered Zone, speak Yunnan official mandarin Chinese, and are now regarded as survivors of the Ming Empire in Mainland China. In the current legal system of Myanmar country, the Kokang is considered as an ethnic minority group under the lineage of the Shan. Unlike Hokkian and Cantonese Chinese immigrants, they are not naturalized citizens of Myanmar. Kokang people have experienced separatism and intended to acquire their autonomy from Myanmar. Nevertheless, there is no detailed anthropological study on the history or modern-day situation related to Kokang people, particularly with regard to issues that are emerging in the time of ethnic conflict. In this essay, based on a fieldwork conducted in the Northern Shan States of Myanmar from February to March 2017, I will first describe how conflict situation is lived by the normal Kokang people, and then will touch upon the recent development of Kokang ethnic/cultural education in the region.

When I visited S township, Northern Shan State in February 2017, a Kokang girl Y had come back to her hometown to celebrate traditional Kokang Lunar New-Year with her family. She introduced me to her grand-mother and explained about the activities that characterized their celebration of the New Year. For the rest of the year, Y told me,

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

1) Hereby, I refer to younger people as those who were born after the 90s' signification of a peace agreement between the Kokang local government and Myanmar's central government.